なりました。さっそく、その記事を英語の文章になおし、さらに自分の思い出の中にあるさまざまな情景も加えて、『日本伝道新報』に発表したのです。

長い病気の床にあって、賤子の心に、なつかしい故郷の会津がよみがえってきました。戦いの苦しみを背負って、若くして死んだ美しい母の思い出、戦いが終わってばらばらになってしまった家族――そうだ、私の一生は、その会津からはじまったのだ、という思いが、はげしく賤子の心をゆさぶったのです。あの会津の家はどうなったのだろう、小川には今も冷たい、きれいな水が流れているだろうか、あの、秋の日にかがやいていた会津のお城はどうなったのだろう。

『会津城の戦い』の最後のところで、賤子はこう書いています。

『二十三日、お城が敵の手に渡される日である。あの美しいお城、われわれの誇りと希望の対象であったあの美しいお城が、敵の手に渡ってしまうのだ――』。